

燎原
京都の民主運動史を語る会機関紙 題字 住谷悦治

燎原社
代表 天野和夫
事務所
〒602 京都市上京区智恵光院
竹屋町上ル 品角方
会費・誌代とも年3,000円



伊吹山 小林三郎

『船乗り』(二)
泉隆君の思い出を語る座談会記録(三・完)
御藏山どんどん文庫

京都の民主主義文学同盟結成の頃
—30年前をふり返って—

田中豊蔵

吉田弘子

松村茂

京都の民主主義文学同盟 結成の頃

—30年前をふり返つて—

松村 茂

第二十四回京都赤旗まつりが九月二十四日、船井郡八木町の大堀川緑地公園で開かれ、今回で三回目を迎えた京都民報社企画の「大パネル展／京都における日本共産党の歩み」で、地元の湯浅貞夫氏＝党府委員＝が『民主人士色紙展』を提供されました。

その会場で湯浅氏から『燎原』誌に民主主義文学同盟京都支部結成30年の思い出を寄せて欲しいと言われましたので、『燎原』誌と文学運動の記録は似合うかなと、一瞬思いましたが、それでも必要あればと思い、お引き受けしました。

日本民主主義文学同盟は今年八月に創立30年を迎えました。各地で記念行事が行われています。機関誌『民主文学』の読者にとどまらず、広く文学愛好者はもとよ

り、広範囲な各層へも参加をよびかける取組みを行っているようです。

三十年前に京都での結成には私も参加しました（現在は日本児童文學者協会京都支部長を担当しています）。

京都は東京での結成大会から半年おくれの六六年三月十三日、四条高島屋の裏にあった信養院（現在・高島屋駐車場）で、准同盟員二十人が集まり、「人民の立場に立って日本文学の民主主義的な発展をめざす」ことを目的とし、初めての本格的な運動のスタートを始めました。

当時は京都市内の南支部（新町会館内）、東部支部（左京下鴨、武田氏氣付）、京大A支部（京大職組、奥井氏氣付）、乙訓支部（長岡町、山室氏氣付）の四支部で、各支

部合同の通信誌『花岡岩』の発行など決めました。このつどいの記念写真が残っていますが、今日それぞれの近況を知ることができるのは、草川八重子、吉村康、足立晃、多田博美、梅田忠夫その他で当時の写真を見ると「さあ、世の中をきりひらく民主文学を書いて行くぞ！」と若く澁刺とした表情で気構えを感じられます。

当時、アメリカのベトナム侵略に抗議する運動、京都市長、知事選挙を始め、小選挙区制の策動許さず、市民生活では水道、市電、バス料金の値上げ反対の京都市会への行動など連日、騒然とした情勢でした。

私自身も『京都民報』大判を一人で毎週発行と、各選挙闘争、統一行動をよびかける号外発行などで殆ど家に帰ることもできず、徹夜の連続でした。

そのうえに文学同盟京都全般の指導する役割がありました。若さの勢いはこれを乗りきれて行けました。

最後に私のメモに残された谷口善太郎さんの「選挙十句」（六七年二月二日）のうち「水雨（ひさめ）について賢治（注＝河田賢治）横文華支部、吉田支部があります。

京都支部はこの九月に『京都民主文学』29号を発行しました。

この間、辻村茂治京都支部長など鬼籍に入られました。結成当時からの多くの方々が世を去りました。現在、文学同盟は京都支部、文華支部、吉田支部があります。も反映し、その蓄積が今日生かされていると思います。

「マイクおいて路地の焚火（たきび）にまじりけり」
「丹後路は吹雪（ふぶき）なるらむ友に祈る」

「党をきく善男善女初弘法」を『燎原』の読者みなさんにご紹介します。きびしい時代と（現在も同じですが）心情がうかがえます。

——西口克巳さんの小説『新幹

（京都民報社 社長）

御藏山どんどん文庫

吉田弘子

宇治木幡の御藏山集会所は、第一・第三土曜日の午後になると、子ども達の活気で満ちあふれます。

それは、地域の子ども文庫が開かれているからです。その文庫は、「どんどん来て、どんどん本を借りて、どんどん本を読もう」ということから『御藏山どんどん文庫』と呼ばれています。

十月七日の土曜日は、子どもが二十五人、大人が十人集まりました。本の貸し出しは八十七冊でした。

その日は、牛乳パックを利用して『びっくりへび』をつくることになりました。幼児も、お母さんに手伝ってもらいながら、一生懸命ハサミを使い、セロテープで『へび』をつくっていきます。三年生の男の子は、口の形など、自分で工夫して、一味違う作品にします。箱から『へび』が、勢いよく飛び出すように、輪ゴムの調節に

も気を配っています。

牛乳パックは、一つ残らず『びっくりへび』に、作りかえられました。

「おばちゃん、折り紙をしてもいい」、「お手玉をしてもいい」、「あやとりもしよう」と、子ども達は、たっぷり遊んで帰ります。

勿論子ども文庫ですから、本を熱心に読んでいる子どももいます。

その他、紙芝居、本の読みきかせや、七夕まつり、クリスマスお楽しみ会などの行事も行っています。

又文庫独自でも、子ども達のリクエストに応えて本を買います。その費用及び各活動費は、地域の各町内から頂く援助金でまかなっています。

私たち世話人の勉強会は、主に宇文連や、京庫連（京都家庭文庫連絡会）の主催で続けられています。文庫びらきの案内文には、「読みたい本のたく山ある文庫として、地域の母と子の心の交流の場となり、心のふる里が文庫の中に

ある、そんな夢を持つ子ども文庫にしたい」とあります。
二百人位の子どもが、列をなしに本を借り出し、書棚は空っぽになつた、と言うのは当初のことです。今は昔の話になりました。

それから十五年間、一度も休むことなく、文庫は開かれています。

現在、蔵書は千百四十二冊ですが、宇治市中央図書館から年一回交換で、二百四十冊の貸し出しを受けています。他に宇文連（宇治子ども文庫連絡会）経由で、宇治市社会協議会などの巡回の本が三百六十三冊あって、計千七百四十五冊の図書で運営しています。

新しい本は、図書館や宇文連に毎年リクエストをして買ってもらっています。

又文庫独自でも、子ども達のリクエストに応えて本を買います。子ども達が、一桁になったこともあります。

京都府内の各文庫が、多い年では百以上加入していましたが、今は約六十文庫の加入です。

京庫連（一九七三年発足）で毎月出される『京庫連だより』は、簡単に情報が提供されるだけなく、私たち各文庫の活動の指針ともなっています。

京都府内の各文庫が、多い年では百以上加入していましたが、今は約六十文庫の加入です。

どんぐん文庫でも、一時は、子ども達が、一桁になったこともあります。子ども達が、最近は、「文庫に子ども達が、もどつて来た」ということばも聞かれます。それは、木幡・菟道の地域だけでなく、本市内でも聞かれることです。子ども環境にどのような変化が生じたのか、生じなかつたのか、考えさせられるところです。

（御藏山どんどん文庫
世話人代表）

スグッズなどの実技講習会、児童

泉隆君の思い出を語る座談会記録（三完）

戦前の泉さん（つづき）

品角 三条青年会館での会議、

あれは、第二回党大会でした。府委員の人選の問題で、島津細胞から異議が出た。栗原、谷口両氏が議長団でした。議事が頭打ちになってしまった。議長団退席せよということで議長団が退席する始末。泉さんが「こんな悲しい事件はない。党がこんな混乱に入るのはおかしい」といわれ、議長席に上がつて「我々は党員である、混乱させるな……」。

その時初めて泉さんの気迫の強さを知りました。これは泉さんの諸闘争の中で出ています。はじめは兎のようにおとなしく、だんだん強烈になる、偉い人と思う。僕が入院して死ぬか生きるかといふ時、泉さんが見舞いに来られ、話の中でインドネシアの問題が出た。「家内がもしインドネシアのようになると日本が追い込まれたら、その時お父ちゃんはどうすると聞いたとき、私は『老いぼれたが敵

を一人ぐらいい殺してから死ぬ』と答えた」と語られました。恐ろしい根性だと思いました。

泉さんが入院される前、僕のところへ来訪されて、こんど入院したら最後になるかもわからぬ。お前の顔を見に来たといわれたが、それが本当に最期になりました。

村上　皆さんとくらべて僕のつきあいは嵯峨へきたすぐからです。郷里が「しょだ」ということで昔話を聞かされました。京都府下の畦道は全部知っていると言われました。非常にやさしいが非常に

その時初めて泉さんの氣迫の強さを知りました。これは泉さんの諸闘争の中で出ています。はじめは兎のようにおとなしく、だんだん強烈になる、偉い人と思う。僕が入院して死ぬか生きるかといふ時、泉さんが見舞いに来られ、話の中でインドネシアの問題が出た。「家内がもしインドネシアのようになると日本が追い込まれたら、その時お父ちゃんはどうすると聞いたとき、私は『老いぼれたが敵

会関西支局京都出張所に勤めて、昭和二十二年十二月全国農業会が農協になり変わることになり、実際は二十三年六月に変わった。それまで給料は出すが仕事はせんでよいという事でした。その出張所詰から日農事務所へ転宅した。

私は書記の一員として半年ぐらいために付いて廻っていました。峯山の杉山部落に農地解放の世話を泉さんがされた。その人たちとの対応を見て農民と土地との問題の重大さ、泉さんがこの問題にたずさわれて実際に農民の心に触れて活動をされ、そこに妙にあたたかいつながりを感じました。

農地解放が終って税金問題に移りかわたとき、大田典礼（社会党）が政策問題で意気込んで乗り込んでも来た折、泉さんの応対は実際に堂々たるものであった。今大学ではあればいる全共闘の連中と、赤旗が十二頁建てとなつたことを大手を出て農民運動の書記をやつた泉さんは全く対象的で、最近の一部の連中は農民、労働者の事は頭から抜いて考えている。指導者意識がこびりついている。

小山 私も泉さんを兄弟のようになっていました。思い出の一つは泉さんの情熱に打たれた事です。お互いのあほみたいな真面目な話の中で、「何で京都に出て来られた」と聞きますと「京都で革命の炎をあげるのだ」と大まじめにいわれたのを覚えています。もう一つは言ってよいかどうか奥さ

れた。何か非常に、大きな愛情があれば運動は進まぬ。何ともいえぬ教訓を私はうけました。

晩年の泉さんの人柄に触れて崇拜に近い念をもつ人たち、嵐山桜餅の主人高田君もその一人ですが、京大の重沢先生は知り合いの

高田君を通じて共鳴されたもので、泉さんのなくなられた折、重沢さんは受付をしておられました。泉さんがあぶないという事を高田君から聞かされて亡くなれる前日にようやく行きました。その時少し話をしました。ひきあげた時何か言っておられた。「さようなら」といわれたのでした。最後の別れから悲痛な感じをもつて帰った。大衆運動をやる場合、大衆への愛情が運動の基礎なのだという事をいつまでも頭に残って強く教えられました。

んとの関係です。「じゃじゃ馬をのこして行くのは気がかりだ」、あれは遺言だと奥さんが言われました。率直な愛情を冗談みたいに私に語られたのです。

田村 戰後の泉君の思い出だが、何回かの日農の大会で、泉君が、てんぱんにやつつけられた。私がメッセージに出席していて私の目の前でやられた。泉君がどのように農民を愛し、農民に奉仕したかその過去の歴史を、くそミソに踏みにじる。そういう風に私には受けとれた。席を蹴って立ちたいと思いました。泉隆君は黙って責任ある答弁をしていました。あれは革命家の姿として若い人がうけつべきだ。あの批判に堪えた泉君はえらいと今、そう思っています。

奥田 私が今思い出した大会の事だと思う。泉さんの農民運動を組合主義だと批判、きびしいものがありました。やはり党をつくらねばならぬという事が当時の方針で、大衆的な農民組合よりも、農民委員会をつくれという方針だった。泉さんを総攻撃したわけです。

泉さんのあとをついで実際にやつてみて、やはり農民委員会でなく農民組合で行かねばならんと思ひます。

品角 一言、司会者から提案があるかと思いますが、今日の会合

いました。農村インターの決定書で農民組合ということを確認しました。泉さんには大迷惑をかけました。

田村 泉君よく辛抱してくれた。きっと解ってくれる時が来る」と歯をくいしばった。

東 私は松本というペニネームで篠村へ行かせてもらった。あの軍事道路反対闘争の折篠村を工作しました。貧農中心で党をという方針で、貧農をさがしても居らぬ。それでは組織がうまくいかぬ。そこで古者の経験をききにいつた。泉さんの所へ行って泉さん一ぺん出かけてほしいとのんでも府庁で坐り込んで晩めしをくつたことをおぼえている。

新しい綱領でまちがいが訂正され、泉さんが正しいことが認められました。僕みたいな若造が行って農民のために来てほしいといえ、奥さんにいらまながらよろこんで出かけてくださいた。

品角 七年程前につくった農民同志会の名簿作成の中で沢山亡くなられた方がある。闘争経歴の記録は無くなつた。こういうことでよいのでしょうか。農民同志会をもう一度つくって、古い活動家、

は大変意義ある会合でした。そこでこの今まで別れたら意味がない。第二、第三の佐倉宗五郎、若い人に泉さんを知つてもらいたい。今後年に一回ぐらいは泉さんの追悼会を催したい。

田村 南山城の古い昔の同志たち、いま眠っている同志たち、皆んな出てもらって戦前戦後を通じて出てもらって、大きな泉隆の足跡、日本農民の足跡をつけるよう

にする、これが泉さんへの回向だと思う。不撓不屈の精神をうけついで行こう。南山城には党の力が伸びようとしている。篠村、馬路はしかしまだ強いとはいえない。これを何とかせねば泉隆は浮かばれぬ。まだ語りつき、話したいと思うこととは尽きぬ、どんな文章でも事務所の方に送つて頂きたい。泉君の手記は途中で絶えている。これをお読み出版したい。これは泉君への回向の一つと思う。皆さん御賛成下さい。

(一同拍手)

小山 泉さんは農民運動家でまた文化人でもありました。広い集まりにしたいと思います。

品角 今日の記念に皆さんのお書きをお願いしたい。一枚は泉さん宅へ一枚は事務所に残します。最後に御遺族の方から御あいさつがあります。

泉君代 本日はおいでが嬉しい中をはるばる遠方から御出席いただき、思い出を語つて頂き御厚情あつく御礼申し上げます。亡き父にとって何よりの供養で本当に喜んでいると思います。

今後も父が生前と同様、私共を親しく御指導を賜りますようよろしくお願ひいたします。

春秋二回位会合をもちたい。この点を確認していただければ幸いです。

(散会——午後五時二十五分)

『船乗り』(一)

田中豊蔵

本誌88、89、90号(93.5~93.10)に「生涯を労働者として 南区の田中豊蔵さんの活動」(語り手—田中豊蔵、聞き手—湯浅貞夫)を掲載しました。田中さんは戦前の海員組合、評議会合同労組、無産青年同盟、日本無産党で、戦後は自由労組、日本共産党員として活動された人で、この時、九〇才になっておられました。この文章は今年九二才になられた田中さんが「虫眼鏡」を使って、自己史として書きとめられたものです。第一次世界大戦後、一八才の田中青年が船員になつて以来の様々な体験をリアルに書きつづられていて、戦前のすぐれた社会史、労働運動史の一駒として読みとることができます。

- 六、国際労働會議
- 七、川崎造船の大争議
- 八、再び南洋航路に
- 九、船から上がる
- 十、京都での活動

(一) 船員になつて

私は、明治三六年、すなわち一九〇三年に京都に生れました。家は米屋でしたが、日露戦争後の不況のため倒産し、生活が苦しいので若い時からアメリカ移民に行くことを志していました。しかし、当時の日本政府はアメリカ移民を禁じていました。

私は、それでも、どうかしてアメリカに行けないものかと思いあぐねて船員になつたのです。しかし船員になつても直にアメリカに行けるわけではありません。これが私の苦労の始まりです。

丁度、私の十八才の時です。私は先ず神戸に行きました。神戸市東川崎町五丁目二七五番地の山岸

勝田汽船の社長は勝田銀次郎と

(一) からゆきさんの手紙

物船でした。私はこの新造船の乗組員になつたのです。念願かなつた私は、京都の親に連絡して承諾書を取りました。これでようやく汽船の乗組員になれたのです。

この人々は、スマトラ・セレベス・ジャバ・バタビヤ・スラバヤ・チエリボン・サマラン、そしてインドの港町ボンベー・カルカッタ・カラチなどに売られていました。大半の遊女はこういう所へ売られていきましたが生きて日本国に帰れません。可哀想な人々です。もともと彼女たちは、日本の貧

栄二郎方の海員休養所にお世話をなりました。海員休養所というのは各汽船会社の船員が次の船に乗るのに休んでいるところです。各船会社の水夫長がいて甲板部員などの欠員を満たすために雇いをさがしているのです。

海員手帖を見せ、履歴書を見せると何年乗船していたかが直にわかります。気にいればすぐにOKでつれて行くのです。水夫長も雇入れに来ています。気にいれば欠員を補充します。そして海事局で承認をうけると始めて乗組員になります。

私は早く乗船したいからやきもきしていました。五、六日たって見習水夫の口がかかりました。

広島県因島で新造船が進水しました。神戸市の勝田汽船KKの平明丸です。四千七百トンの中型貨

物船でした。私はこの新造船の乗組員になつたのです。念願かなつた私は、京都の親に連絡して承諾書を取りました。これでようやく汽船の乗組員になれたのです。

この人々は、スマトラ・セレベ

ス・ジャバ・バタビヤ・スラバヤ・チエリボン・サマラン、そしてインドの港町ボンベー・カルカッタ・カラチなどに売られていました。

大半の遊女はこういう所へ売られていきましたが生きて日本国に帰れません。可哀想な人々です。

もともと彼女たちは、日本の貧

いってしばらくして神戸市長になりました。社長は日本商船のセールスマンの案内で南方方面を視察されました。外務省の山崎公使は、

「日本人は一等国民だ。中国人やビルマ人、マレー人に侮辱されない様にせよ、シンガポールの遊廓には絶対に行くな」というような事を新聞で発表していました。一ヶ月後には、このでつれて行くのです。

すなわちからゆきさん(唐行き)は日本から中国に売られて売春をする人々を唐行きといつた)はなくなつたのです。そして、金のある人は芸者・舞妓、上等級の人々は日本に帰国しました。しかし病氣やマラリヤ・風土病にかかる人々は日本に帰国はできません。これを別名ジャパユキさんとも言いました。

この人々は、スマトラ・セレベス・ジャバ・バタビヤ・スラバヤ・チエリボン・サマラン、そしてインドの港町ボンベー・カルカッタ・カラチなどに売られていました。

困な農村の小作人の娘や貧困者の子供です。家が貧しい為に口入れ屋の甘言にかかるて外国の遊女に売られたのです。そして外国人を相手に身体を売り、そのお金を日本に仕送りするのです。そしてまたこの遊女たちは外国人の情報を大使館に知らせます。それを日本の三井・三菱などの商社がきいて大もろけをするのです。まさにこのからゆきさんたちは日本の親元への手紙をよくたのまれました。

私たちには、唐行きさんから祖国の親元への手紙をよくたのまれました。手紙については、軍隊のように、軍の機密に関する事や軍隊の悪いことが書いてあれば取り上げです。どんな人にたのんでもだめなのです。よしや通つても、日本各府県都市の生家についた手紙でも、父母兄弟や、親戚は、後難をおそれて焼いてしまいます。手紙の返事は出せません。

身売りした娘が可哀想でも家の名前と安全のためには変えられなかつたのでしようか。

唐行きさんは、それでも父母兄弟の手紙を待ちつづけているし、薬をもつかむ想いで、私達に手紙

を託すのです。

私達が港につくと唐ゆきさん

が、「勇氣のある人、正直な人、手をあげて下さい。たのみます。国元の親に手紙をことづけて欲しいのです」とたのみます。

私は一人手をあげました。六人の遊女は、

「京都さん、ありがとうございます」といいます。私は京都出身と申していましてからおぼえているのです。

「可哀想だと思つて：日本の門司港についたら、まちがいなく手紙を生家にとどけて下さい」と、泣いてたのむのです。

私は大胆にこれを引き受けました。「ひきうけた。大丈夫、安心しなさい」というと、相手は感心して、

「元気な人だ、たのみます」と涙を流して喜びました。そして彼女はタバコを五人に一ヶづつ呉れました。そして父母兄弟に手紙が受取られればお礼をすると誓いました。

私があづかったのは、老婆と生母さんへの二通の手紙でした。彼女はよい人に出会えばいつでも渡せる様に手紙を書いて身体にあたためていたのです。

そして彼女は、私に「ボンボン、一寸おいで…」と手招きをす

るのです。私が、隣の部屋へ行くと、彼女は声を細めて、

「ボンボン、この様なところには二度と来なさるなよ」といいましたからおぼえています。

私と比べればお母さんの様な年の彼女です。

「現地の女人は病気がよく感染するから絶対に行つたらあかん」と言い聞かせるのです。そして、

「ボンボン、よく見ておきな。『こんな所が、どこがよいのだ』」といって前をまくつて見せました。

皆んなに、その話をすると船員たちは笑っていました。

私は一日で出港しました。一路

なつかしの日本へ：まぶたにうかぶ故国へ一週間、門司港につきました。

波おだやかな航海でした。台湾沖まで来ると、日本の各所に無線電信がとどきます。文明のおかげです。日本本土との通話ができま

す。私は門司港に着き、私は早速、唐ゆきさんからあずかった手紙を、鹿児島県指宿郡山川村の

親御さんに田中豊蔵の手紙とあわせて出しました。

私は勝田汽船KKの乗組員で田中豊蔵というのだ。あなたの娘さんからこの手紙をあずかった。

私は門司港を出て神戸港に入港するから、三、四日は碇泊する。お目にかかれますから来て下さい。

詳しいことは面会の上でお話しします」と書いて送ったのです。

神戸の第二突堤の倉庫に砂糖や、インド綿をおろしている平明丸の甲板部員田中豊蔵と、だれに聞いてもらつてもよくわかります、と書いてやつたのです。

三日目に鹿児島県からあわてて、娘の父親が私をたづねてやってきました。三日目に鹿児島県からあわてて、娘の父親が私をたづねてやつてきました。

丁度正午頃でした。私はすぐ面会しました。お父さんは曰く、「この度はお世話様になりました。よく手紙をとどけて下さいました。厚く御礼を申し上げます」とのあいさつ、私は

「明日出港するので心配していました。お父さん二女さんはとても元気です。向こうへ行って十九年、病氣もしたが、長年辛抱しました。お父さん二女さんはとても元気です。向こうへ行って十九

年、病氣もしたが、長年辛抱して、生家に送金したのは大したもんですね」というと、お父さん

は、

「その金で、畑や田をかいました。助かっております。しかし今帰つてこられると困ります」

と。

私は思いました。しかしこの金は、大半は借りた金だ、今はチリヂリバラバラになつて次の国に行かねばならぬ。そして一日一日が病気と死を待つてゐる様な人生です。彼女たちは、父母の元気な姿を一目でも見たいと思いながら、毎夜、毎夜働いてゐるのです。

「一度、生家の父母に一目でも面会したい」といつていらされました。今年で三十七になったといつていらました」と私がいうと、父親は涙を流していられました。「あわれな娘と思つて下さい。手紙を出しても返事は来ません。お金は銀行から送りますから、父母の方に渡ります」といっています。

彼女たちは、受取りもはだみはなさずもつてゐます。病気や色々なことで死んでしまつた友達が多くあるのです。

(三) 北はシベリヤ 南はジャバよ

私はお父さんから娘に渡していくと、またのまれた手紙を大切にベットの下に入れていました。

朝、出港し名古屋港でインド綿をおろし、次に行く先がわかりません。

私は南洋航路になればよいと心に念じております。彼女たちは雇主から多くの借金をして、いづこに売られても死ぬまで働き通し、内地の父母に面会もできず、兄弟にあえるやらわかりません。夢にも見ることが多いことでしょう。

私は、南洋航路になれば、早く手紙を渡してあげたいと祈つていました。

当時、カラゆきさんの歌がはやつていました。
北はンベリヤ、南はジャバよ
流れ流れて行く先は……

シンガポールから流れ流れて行った唐ゆきさんは、西に東に南に北に、

インド・カルカッタ・カラチ・ポンベイ・セイロン・コロンボ・南ジャバ・スマラバヤ・バタビヤ・スマラン・ボルネオ・スマトラ。いづくに流れつくやらわかりま

せん。

私は親の手紙をもつて彼女たちに渡さねばならないと思い彼女らの一部だけでもシンガポールに残つていて呉れればと祈つていました。

私は達の平明丸は名古屋で積荷の綿を全部おろしました。私は制服の一等運転士（ファスト・オフサー）に聞きました。「多分、印度のボンベイ港にいくだろう」と

の事、私は喜びました。ファスト・オフサーは「誰にも言うなよ」と申されました。

二日間碇泊しているうちに、名古屋港の積荷は瀬戸のインド向き陶器です。その他、シャツ、インド人の服、木綿などの織物を積みました。そして途中、神戸港により南方方面の人々が好む、染物、木綿をシンガポールで一度おろして、ジャバ、スマトラ、ボルネオ、セレベス方面をまわります。

九州の門司港では福岡県大里のサクラビルを多く積込んで薬品をデッキに積込みますと、五、六時間で出港です。船は玄界灘に出ます。

鳥もかよわぬ玄界灘に……

さしかかりました。船員たちは、明治三十七、八年のロシヤとの戦争で日本海海戦が行われた時の東郷平八郎元帥のことを思い出します。

二日程で上海に入港、中国行きの荷物をおろし、上海港からは中国の華僑の品物をシンガポールの隣りのピーナンに送ります。華僑は全世界に店を持つ商人でピーナン市は華僑の別荘地です。何十万トナールは彼女の父母からあづかっ

た手紙を渡さねばならない町です。私はどんなことがあっても渡さねばと思っていました。

(以下次号)



会や本誌について、編集部担当の奥田修三（宇治市広野町寺山17-257、○七七四・四三・一三四七）、湯浅貞夫（京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六）の両名のいずれかにご連絡下さい。